

熱性止血法を用いた動物に優しい医療の検討

○藤井康一¹、日原由貴¹、中野康子¹、宇佐美文字¹

¹⁾ 藤井動物病院

I. はじめに

動物医療における近年の進歩は目覚ましく、より高度な医療が求められるようになった。一般臨床においては、安全安心な動物に優しい医療を目指していくことが大切である。近年、疼痛管理に対する関心が高まり、鎮痛薬の使用法や麻酔法が見直されてきている。外科手術においては、より低侵襲で生体に負担のない医療が求められており、手術自体の見直しも重要であると考えられる。我々はより低侵襲な手術を実現するべく、近年人医療分野において応用されている新しい熱性止血法に着目し、動物における有用性を検討した。

II. 材料及び方法

避妊を目的に当院へ来院した健康犬で卵巣動静脈の血行遮断を①結紮糸を用いて行った群
②熱性止血を行った群に分類し、去勢を目的に来院した健康犬に対しては、精巣動静脈の結紮を①吸収糸を用いた群 ②熱性止血を行った群に分類して検討を加えた。熱性止血は ERBE 社製 Biclamp を使用した。評価方法は、手術前、手術後に初期炎症蛋白である CRP 濃度を測定することにより行った。手術前と手術後の CRP 濃度の差を求め、統計学的に検討を加えた。

III. 成績

避妊手術において、結紮糸を用いた群の術後 CRP の上昇は、熱性止血を行った群と比較すると明らかな差が認められた。

去勢手術において、吸収糸を用いた群の CRP の上昇は、熱性止血を行った群と比較すると明らかな差が認められた。

IV. 考察

熱性止血を用いた群では、結紮糸、吸収糸を用いた群と比較して術後の炎症反応は低く、より低侵襲な処置が可能であった。従来の方法と比較して熱性止血を用いることで術後疼痛の軽減も可能であると考えられる。動物に優しい医療を目指して、今後は動物医療においても、熱性止血法を積極的に導入していくことが推奨される。また、熱性止血を用いた方法は一例に過ぎない。今回報告した止血法にとどまらず、外科的処置一般、検査一般、治療一般においても、動物に負担をかけない医療を目指し、今後様々な分野での研究、検討を行なっていく必要があると考える。